

韓・中・日の3ヶ国の大学生の言語行動の 相互評価に関する一考察*

李吉鎔**

ih_kilyong@cau.ac.kr

目次

- | | |
|-----------------------------|-----------------------|
| 1. はじめに | 3. 韓・中・日の依頼発話に対する相互評価 |
| 2. 調査の概要 | 3.1 自国人および相手国人の評価の近似性 |
| 2.1 韓・中・日の3ヶ国人の言語行動調査の概要 | 3.2 各国語の依頼発話のステレオタイプ性 |
| 2.2 韓・中・日の3ヶ国人の依頼発話のステレオタイプ | 3.3 日本語の依頼発話の定型性 |
| 2.3 相互評価調査表の構成 | 3.4 評価項目の意味するもの |
| 2.4 相互評価調査の概要 | 4. まとめ |

Key Words : 異文化間コミュニケーション(cross-cultural communication)、言語行動(language behavior)、相互評価(mutual evaluation)、依頼発話(request utterance)、丁寧(polite)、対人配慮的(consideration for others)、目的指向的(goal oriented)

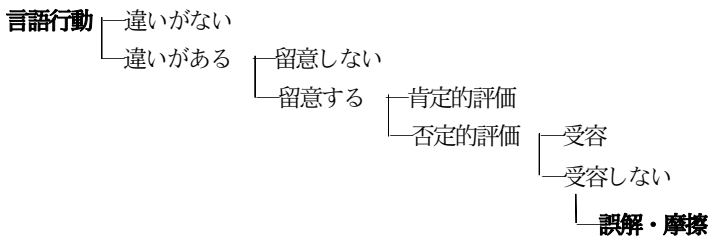
1. はじめに

従来の多くの異文化間コミュニケーション研究は、研究の意義として、

* This work was supported by the Korea Research Foundation Grant funded by the Korean Government (KRF-2008-321-A00114)

** 中央大学校人文大学アジア文化学部副教授、社会言語学

コミュニケーション上の誤解や摩擦の解消に役立てようという社会的な有用性をあげている(西原1994、李吉鎔2001、尾崎編2008など)。社会言語学の問題意識のひとつである「社会問題に対することばの面での対処」(渋谷1998)を目的としたものであろう。しかしながら、異文化間コミュニケーション研究がコミュニケーション上の誤解や摩擦の解消に役立ったという報告は、管見の限りにおいて見当たらない。言語行動の違いによって誤解や摩擦が引き起こされる可能性は否定できないが、言語行動の違いそのものが誤解や摩擦を引き起こす直因ではない。コミュニケーション上の誤解や摩擦の生成プロセスは、ごく簡略にまとめても、次のようなものが考え得る(李吉鎔2011)。



言語行動の違いが相互の話者にどのように評価されるかによって誤解の生まれる度合いは異なり得ると言える。たとえば、韓国人には一般にプラス評価を受ける「他人の領域を踏み込んでまで人間関係の濃密さを強調する行為」や「自転車を貸してくれるだろうと、楽観的な態度をとること」などは、日本においてはマイナス評価を受けるということが指摘されている(大塚2004、元智恩2010など)。ここに「評価に関する研究」が要求されるのである。

1) なお、韓国の日本語教育の現場において異文化間コミュニケーション教育の啓蒙的な役割を担ってきた奥山(2011)によれば、社会言語学の分野からのアプローチによる異文化間コミュニケーション研究の成果を教育に導入することによって学習者の異文化間コミュニケーション理論への理解が進むことがあるといい、将来的に必要なことは、異文化間コミュニケーション研究と異文化間コミュニケーション教育の連携であるということを指摘している。

大塚(2004)や元智恩(2010)などは、こうした問題意識から出発した「言語行動の評価」に注目した研究である。大塚(2004)は日本人と韓国人の接触場面における言語行動に関係すると考えられる「不愉快」を指標として比較を行った。120個の不愉快項目について日本人と韓国人の不快感の相関関係を調べた結果、日本人が韓国人より顕著に不快に感じる項目に共通している特徴は「他人の領域に踏み込む行為」であり、反対に、韓国人が日本人より有意に不快に感じる項目に共通している特徴は「人間関係の希薄さを感じさせる行為」であることを明らかにした。一方、元智恩(2010)は日本人と韓国人、また韓国人日本語学習者を対象としてポライトネス・ストラテジーに対する意識を問う調査を実施し、配慮という意識を比較検討した。その中で、「楽観的な態度をとること」というポライトネス・ストラテジーについて、韓国人は肯定的な評価をしているが、日本人にとっては凶々しく配慮のない行為であるという否定的な評価を受けることが指摘されている。

このような行為やストラテジーに対する評価研究の成果をも参照しつつ、本研究では、韓・中・日の3ヶ国の大学生(以下、本研究では3ヶ国人とする)の「依頼」という目的指向的な言語行動に注目し、一部に「直接的依頼、間接的依頼」という表現形式面も関わるが、「状況の説明、同意書の必要性、謝罪表現の有無」といった内容面を対象に相互評価を実施する。そうすることで韓・中・日の3ヶ国人の依頼発話に対し、それぞれどのような評価が行われており、それはどのような要因によるものか、といった要因究明を試みる。もしある国の言語行動が他国の人に否定的に評価されることがあり、また生駒・志村(1993)の言うように、言語行動上の転移があると仮定されるのであれば、そこに異文化間コミュニケーションにおける摩擦の引き起こされる可能性があると考えるのである。

以下では、次の構成に沿ってまとめていく。まず、第2節で韓・中・日の3ヶ国における異文化間コミュニケーションの普遍性と特殊性に関する研究プロジェクトの概要を報告する。その後、評価研究調査の概要をまとめる。第3節では、韓・中・日の3ヶ国人の言語行動に対する相互評価の結果をまとめ、解釈を施す。最後に第4節ではまとめと今後の課題について述べる。

2. 調査の概要

2.1 韓・中・日の3ヶ国人の言語行動調査の概要

本研究は、韓・中・日の3ヶ国における異文化間コミュニケーションの普遍性と特殊性に関する研究プロジェクトの一部である。この研究プロジェクトでは、目的指向的な言語行動の開始から終了までの一連の行動、すなわち、(導入部)あいさつ-自己紹介-(主要部)依頼-誉め-誉めに対する返答-勧誘-断り-謝罪-不満表明-釈明-(終結部)感謝-あいさつ、などという一連の行動の連鎖を総体的に把握することを目的とする(詳細は李吉鎔2011を参照されたい)。主要部の依頼行動の具体的な内容として、近年ますますその重要度が高まってきた「個人情報」という抽象的な内容を取り入れたことは大きな特徴である。具体的な分析項目は、まず韓・中・日の3ヶ国人の言語行動の相違を明らかにし、韓・中・日のことばを第2言語として用いる韓・中・日の3ヶ国の人の中間言語の様相を明らかにすることである²⁾。

この研究プロジェクトの資料の収集は、次の2種類の調査によって行われた。

- (a)言語行動の実態把握のためのインタビュー調査:2009年4月19日~2009年10月22日、韓国・中国・日本で93名を対象に行った。
- (b)言語行動のモデル設定のためのアンケート調査:2009年5月~12月、韓国・中国・日本で1210サンプルを収集した。

その中で、こうした韓・中・日の3ヶ国人の言語行動に関する使用意識および3ヶ国人の相互評価意識を問うている。このことは本研究プロジェクトのもう一つの大きな特徴である。3ヶ国人の言語行動のステレオタイプに

2) その成果の一部は次のようにまとめられている。

김종원(2010) 「한중일 의뢰행동의 발화패턴 분석 -한중일 대학생 설문지조사를 중심으로-」 『일어일문학연구』 제73집 한국일어일문학회 pp.111-139
 임영철 · 김윤희(2010) 「한일 거절표현의 구조에 대한 사회언어학적 접근」 『일본연구』 제43호 한국외국어대학교 일본연구소 pp.525-540
 임영철 · 황혜선(2010) 「한·중·일 3국의 의뢰과정에서의 해명에 대한 대조사회언어학적인 연구」 『일본근대학연구』 제30집(상) 한국근대일본학회 pp.63-81

対する互いの評価意識を調べることで、コミュニケーション上の誤解や摩擦に関する研究に一步近づくことができると考える。

「言語行動に対する相互評価」調査は、次の研究方法によって行われた。

まず、インタビュー調査の結果およびアンケート調査の結果を観察し、韓・中・日の3ヶ国人の「依頼」「(不満表明に対する)説明」「断り」の言語行動の特徴的な内容面のパーツを取り出し、再構成することで、3ヶ国人のそれぞれのステレオタイプに最も近いと考えられる発話を選定する。この発話は、インタビュー調査から得られた生の資料の寄せ集めであり、言い淀みやフィラーなどを除いた簡潔な形になっている。

次に、韓・中・日の3ヶ国人の言語行動のステレオタイプを各国語に訳す。その際、内容面に注目し、文体は次のように統一する。すなわち、日本語は「です・ます体」、韓国語は「합쇼체」のとおりである。ただし、中国語および日本語の韓国語への翻訳において、接続助詞で終了する発話が自然だと判断される箇所は、接続助詞に尊敬を表す形態素「요」をつけたところがある。また中国語は日本語と韓国語とは統語的な系統や活用などを異にするため、直訳しにくい箇所があった。

そして、3ヶ国人の言語行動のステレオタイプに対する評価項目を、先達の成果を参照し、「丁寧」「具体的」「論理的」「対人配慮的」「目的指向的」の5つに設定する。

さらに、5つの評価項目について、「全く違う」「少し違う」「少し違うだ」「とてもそうだ」の義務的な4段階の評価をしてもらう。

2.2 韓・中・日の3ヶ国人の依頼発話のステレオタイプ

本研究では「依頼発話」に焦点を当てて分析する。韓・中・日の3ヶ国人の依頼発話のステレオタイプおよび各国語訳は、次のようなものである。

(1) 韓国語の依頼発話のステレオタイプ

안녕하세요 교수님. 다름이 아니라 제가 취업에 도움이 되는 미국 탐방 프로그램에 지원했습니다. 정말 유익한 프로그램이라 좋은 경험이 될 것 같습니다. 바쁘

신 데 죄송합니다만 교수님의 동의서가 꼭 필요해서 부탁 드리러 왔습니다.

(中国語訳:您好, 教授。我申请了一项对就业很有帮助的美国探访活动。我觉得是个非常有益的活动,会成为很好的经验。您这么忙还打扰您, 真不好意思。可我真的是非常需要教授的同意书, 所以来拜托您。)

(日本語訳:こんにちは、先生。実は、就職に役立つと思って、アメリカの大学の訪問プログラムに申し込みました。とても有益なプログラムでよい経験になると思います。お忙しいところすみませんが、先生の同意書がどうしても必要なので、お願いに参りました。)

(2) 中国語の依頼発話のステレオタイプ

您好, 教授。最近有一项美国探访活动, 主办方要求必须提交教授的同意书。能不能请教授帮我写一下同意书?

(日本語訳:こんにちは、先生。実は、アメリカの大学の訪問プログラムがあるのですが、主催者側から必ず、先生の同意書を提出すると言われてます。私に同意書を書いてくださることはできますか。)

(韓國語訳:안녕하세요 교수님. 최근에 어떤 미국 탐방 프로그램이 있는데 주최 측에서 요구하기를 반드시 교수님의 동의서를 제출하라고 해서요. 교수님께서 저에게 동의서를 써 주실 수 있으시겠습니까?)

(3) 日本語の依頼発話のステレオタイプ

お忙しいところ申し訳ございませんが、実は、大学生を対象としたアメリカの大学の訪問ができるプログラムがあり、参加してみたいと思うのですが、もしよろしければ、先生に同意書をお願いできないでしょうか。

(中国語訳:您这么忙还打扰您, 真不好意思。是这样, 我想参加一个以大学生为对象的美国探访活动。如果可以的话, 能不能麻烦您帮我写一份同意书?)

(韓國語訳:바쁘신 데 죄송합니다만 사실은 대학생을 대상으로 미국 대학 탐방을 할 수 있는 프로그램이 있어서 참가해 보려고 생각하는데요. 혹시 괜찮으시다면 동의서를 교수님께 부탁 드릴 수 없겠습니까?)

韓國語の依頼発話のステレオタイプは、[挨拶-呼びかけ-状況の説明-応募の動機-謝罪表現-同意書の必要性-依頼表現]によって構成される。「就職など、自分にとって有益である」といった応募者中心の内容となっている点および「お願いに来た」という間接的な依頼表現になっている。

中国語の依頼発話のステレオタイプは、[挨拶-呼びかけ-状況の説明-同意

書の必要性-依頼表現]によって構成される。主催者側の要求によるものであるという同意書の必要性の説明および「私に同意書を書いてくださることはできますか」のような直接的に相手の能力を問う形の依頼表現になっていることは注目に値する。

日本語の依頼発話のステレオタイプは、[謝罪表現-状況の説明-条件表現-依頼表現]によって構成される。具体的なプログラムの内容や同意書の内容などに触れることなく、依頼を行っている。依頼表現は「お願いできないでしょうか」というように否定疑問文を使用している。なお、日本語の依頼発話の中国語訳において、否定疑問文は使用されていない。中国語に否定疑問文がないわけではないが、指導教授に対して使用するの適切ではないという意見が提起されたため、この場面に最もふさわしいと思われる表現に訳している³⁾。この中国語訳を日本語に再度訳すると、「お手を煩わせずみませんが、私に同意書を書いてくださることはできますか」のような意味合いになる。

2.3 相互評価調査表の構成

依頼発話の相互評価調査の調査表は、次のように構成されている。

(1) 質問文

アメリカの大学の訪問プログラムに参加するため指導教授に同意書を依頼する場面で、Aさん、Bさん、Cさんはそれぞれ下記のように答えたとします(三人の答えをご確認ください)。この答えに対して、あなたはどのような感じがしますか。5つの評価項目について、項目ごとに①~④の中から一つ選んで、○印をつけてください。

(2) 指導教授の誘導文

指導教授の発話:韓国語:오늘 오기로 했었지? 그런데 무슨 일이지?

(中国語:你是今天约好要来的学生吧? 找我有什事啊?)

(日本語:今日、来ると言ってたよね? で、用件は何かな。)

3) このことは、たとえば指導教授にお茶を勧めるときに、「先生、お茶を飲みたいですか」などと相手の欲求・願望を聞くことと似ていると思われる。

(3) 3つの依頼行動の提示(日本の調査の場合)

Aさんの答え:日本人の言語行動を提示

Bさんの答え:中国人の言語行動の日本語訳を提示

Cさんの答え:韓国人の言語行動の日本語訳を提示

(4) 評価項目および尺度の提示

評価項目: 「丁寧だ」「具体的だ」「論理的だ」「対人配慮的だ」「目的指向的だ」の5つ

尺度: 「①全く違う」 - 「②少し違う」 - 「③少しそうだ」 - 「④とてもそうだ」の4段階

2.4 相互評価調査の概要

依頼発話に対する相互評価調査は、それぞれソウル、北京、東京で行われ、計936サンプルが収集された。調査の時期および地域、協力者の人数などの詳細を表1に示す。また表2は、有効回答の詳細を示したものである。

表1 調査の概要

	調査の時期	地域/大学	調査協力者
韓国	2009年12月	ソウル/中央大学校	大学生・大学院生314人
中国	2009年12月	北京/北京外国語大学	大学生・大学院生323人
日本	2009年12月 2010年 5月	東京/東京大学・早稲田大学	大学生・大学院生299人

表2 有効回答の詳細

	全体	平均年齢	(男	女	N)
韓国	307(全回答の97.8%)	21.5才	(144	163	-)
中国	322(全回答の99.7%)	19.3才	(90	203	29)
日本	293(全回答の98.0%)	20.5才	(116	176	1)
計	922	20.4才	(350	542	30)

(Nは無回答)

なお、一つの問いに重複して答えた場合や回答してくれなかった場合を無効回答と処理した。また、すべての評価項目に同一評価を行ったもの(韓国で7件、中国で1件、日本で6件)も無効回答として除いている。

3. 韓・中・日の依頼発話に対する相互評価

本節では、韓・中・日の3ヶ国人の依頼発話に対する、3ヶ国人の相互評価を考察する。次の表3は、3ヶ国人の依頼発話(横軸)について、3ヶ国人の人々の評価(縦軸)をまとめたものである。表の縦軸の下方には、各国人の評価のほか、自国語以外の相手国語に対する評価を示している。表中の数値は、4段階の評価の平均と標準偏差(表中のSD)であり、平均は4ポイントを最大とする(小数点第2桁で四捨五入)。標準偏差は、平均0.75(最大で0.88、最小で0.61)であり、バラつきは少ないと判断される。また、3ヶ国人の人々の評価において、男女差は全く見られなかったことをあらかじめ報告しておく。

表3 韓・中・日の3ヶ国人の依頼発話に対する相互評価

		韓国語の依頼発話		中国語の依頼発話		日本語の依頼発話	
		平均	SD	平均	SD	平均	SD
韓国人の評価 (n=307)	丁寧	3.50	0.65	2.37	0.73	3.41	0.72
	具体的	3.09	0.76	2.55	0.77	2.79	0.75
	論理的	2.92	0.79	2.38	0.64	2.59	0.71
	対人配慮的	2.86	0.85	2.12	0.77	3.18	0.77
	目的指向的	3.43	0.67	3.40	0.73	2.89	0.71
中国人の評価 (n=322)	丁寧	3.28	0.76	2.52	0.73	2.93	0.66
	具体的	3.46	0.70	2.38	0.71	2.78	0.63
	論理的	3.11	0.86	2.71	0.67	2.84	0.64
	対人配慮的	3.32	0.78	2.00	0.73	3.24	0.61
	目的指向的	3.29	0.76	3.39	0.72	2.95	0.69

日本人の評価 (n=293)	丁寧	2.96	0.86	2.36	0.79	3.54	0.66
	具体的	3.24	0.80	2.77	0.83	2.82	0.82
	論理的	3.01	0.83	2.66	0.84	2.84	0.87
	対人配慮的	2.67	0.88	2.14	0.74	3.25	0.83
	目的指向的	3.40	0.77	3.05	0.84	3.08	0.79
相手国人の評価	丁寧	3.12	0.81	2.37	0.76	3.17	0.69
	具体的	3.35	0.75	2.66	0.80	2.78	0.69
	論理的	3.06	0.85	2.52	0.74	2.72	0.68
	対人配慮的	2.99	0.83	2.13	0.76	3.21	0.69
	目的指向的	3.35	0.77	3.23	0.79	2.92	0.70
		(n=615)		(n=600)		(n=629)	

以下では、表3をもとにし、次の4つの側面から結果を確認していく。

- (1) 自国人および相手国人の評価の近似性(\$3.1)
- (2) 各国語の依頼発話のステレオタイプ性(\$3.2)
- (3) 日本語の依頼発話の定型性(\$3.3)
- (4) 評価項目の意味するもの(\$3.4)

3.1 自国人および相手国人の評価の近似性

次の図1と図2は、それぞれ各国人の評価および自国語以外の相手国語に対する評価を示したものである。

図1 依頼行動に対する自国人の評価

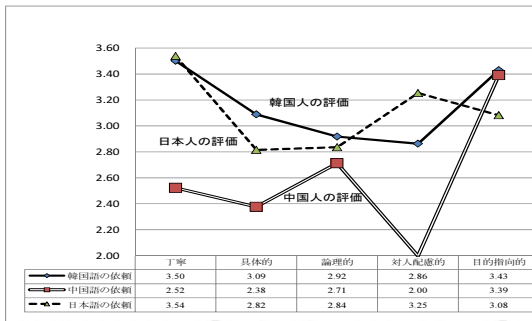


図2 依頼行動に対する相手国人の評価

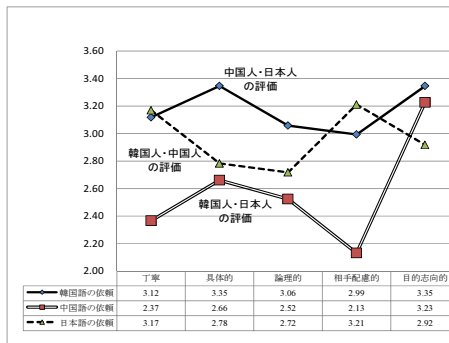


図1と図2とを比較的に検討すると、以下のことがわかる。

- (1) 図1の自国人の評価の結果と図2の相手国の人々の評価の結果とを比較すると、各国語の依頼発話に対する評価が逆転されることはない。つまり、程度の差はあるものの同様の曲線を描いているということである。3ヶ国人は、自国語および相手国語の依頼発話に対して、近似した評価を行っていることがうかがえる結果である。
- (2) 図1の結果と図2の結果とを比較すると、韓国語と日本語の発話が「丁寧」であるという評価が下がり(それぞれ0.38ポイント(韓国語)、0.37ポイント(日本語))、また韓国語および中国語において「具体的」という評価が高くなる(それぞれ0.26ポイント(韓国語)、0.28ポイント(中国語))。

3.2 各国語の依頼発話のステレオタイプ性

前節で相互評価の全体像を確認した。本節では、各国語に対する具体的な評価を見ておこう。次の図3~図5は、韓国語や中国語、また日本語の依頼発話のステレオタイプに対する3ヶ国人の評価をまとめたものである。

図3 韓国語の依頼行動に対する評価

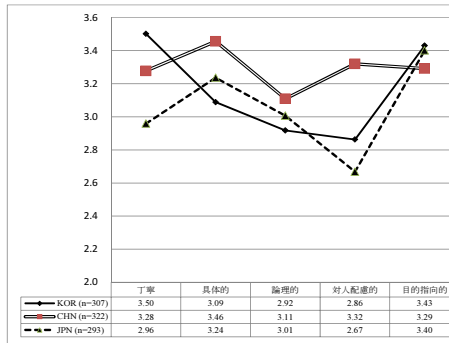


図4 中国語の依頼発話に対する評価

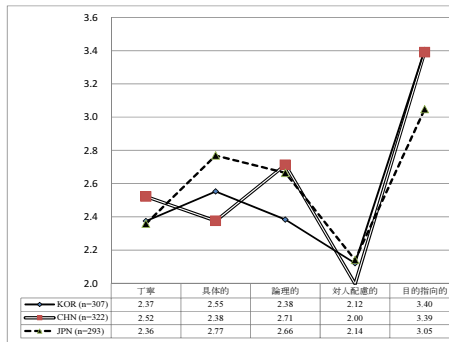


図5 日本語の依頼発話に対する評価

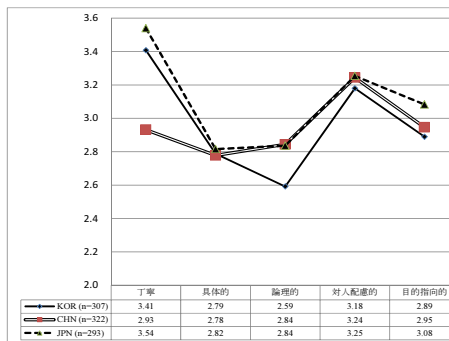


図3~図5からは、自国語の「丁寧」と「目的指向的」項目を相対的に高

く評価するといった一貫した特徴が観察された。各国語の依頼発話のステレオタイプがしかるべきものとして認められるという証拠になる。このことから、まず、日ごろの言語生活において、慣れきった内容の依頼発話について「丁寧」という好意的な評価を行うことがわかる。次に、外国人の立場から解釈するなれば、自己中心的内容(韓国語)、または主催者側に責任を転嫁する内容(中国語)、あるいは具体性のない内容(日本語)であっても、それぞれ依頼という目的指向的な発話行為に最も望ましいと判断するということになる。

ここで仮に、3点以上を高評価とし、2.5点から3点までを中評価、2.5点未満を低評価とするならば、各国語の依頼発話についての3ヶ国人の共通評価は次のようになる。

表4 各国語の依頼発話に対する3ヶ国人の共通評価

	低評価 (2.5未満)	中評価 (2.5-2.99)	高評価 (3.0以上)
韓国語の依頼発話	-	-	具体的・目的指向的
中国語の依頼発話	対人配慮的	-	目的指向的
日本語の依頼発話	具体的・論理的	目的指向的	対人配慮的

ここで、簡略に図3~図5における個別的な特徴を確認しておこう。

まず、図3の韓国語の依頼発話に対する中国人の評価について、「対人配慮的」項目が高いのは「お忙しいところすみませんが」などという謝罪表現が高い評価(3.32)につながった可能性がある。こうした謝罪表現は日本語の依頼発話にもあり、日本語の依頼発話に対する中国人の評価もまた高いのである(3.24)。一方、「丁寧」および「対人配慮的」を相対的に低く判断した日本人の評価は、プログラムの内容や指導教授の役割などについて触れることなく、「自分の就職や自分にとって有益である」といった応募者中心の述べ方に関連しているようだ。

次に、図4の中国語の依頼発話において「目的指向的」項目が、3ヶ国人に共通して高く評価されているのは、「主催者側の同意書要求」というや

や強引な「同意書の必要性」が影響していると思われる。また、3ヶ国人に共通して低く評価されている「対人配慮的」項目については、同意書の必要性を主催者側に責任転嫁するような印象を受けたり、「私に同意書を書いてくださることはできるか」という能力を問う直接的な表現などが影響していると思われる。

さらに、図5の日本語の依頼発話において「対人配慮的」項目が高く評価されるのは、「謝罪表現」や「条件表現」、否定疑問文といった間接的な「依頼表現」などによるものと思われる。一方、「具体的」、「論理的」項目が相対的に低く評価されるのは、具体的なプログラムの内容や同意書の内容などに触れることなく、依頼を行っているためと考えられる。なお、中国人が「丁寧」項目を相対的に低く評価していることについては、日本語の中国語訳の文体が異なっているという翻訳上の問題が影響している可能性があることは否定できない。

3.3 日本語の依頼発話の定型性

ここでは、表3の横軸に注目し、各国人の評価を個別に見てみよう。次の図6~図8は、各国語の依頼発話に対する韓国人の評価(図6)、中国人の評価(図7)および日本人(図8)の評価を示したものである。

図6 各国語の依頼発話に対する韓国人の評価(n=307)

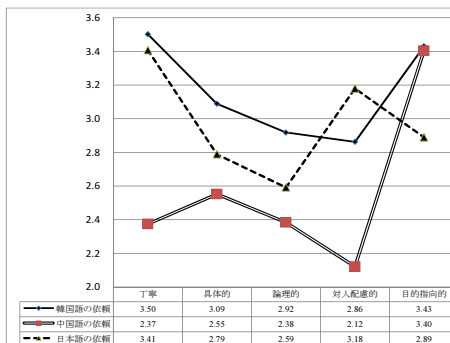


図7 各国語の依頼発話に対する中国人の評価(n=322)

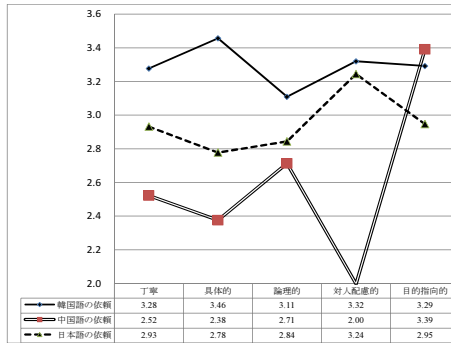


図8 各国語の依頼発話に対する日本人の評価(n=293)

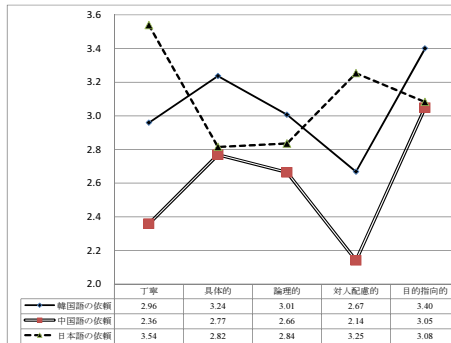


図6~図8を見ると、まず注目に値するのは、日本人における自国語の言語行動に関する評価の高さである。日本人の依頼発話に関して定型的な形態が存在するということであろう。「丁寧」と「対人配慮的」項目において韓国人と日本人との差が大きく開いていることが見て取れる。たとえば、「丁寧」項目について、図6の韓国人の評価は0.09点の差(韓国語の優位)であるが、図8の日本人の評価では0.58点の差(日本語の優位)である。

ここで「依頼発話に関する日本人役割語」なるものが設定できるとすれば、その具体的な姿は、発話の意図を明確に示すということ以上に重視される丁寧さと対人配慮とでも言えるものである。なお、中国人、韓国人の言語行動については、日本人と比べるとこのような定型性は認められにく

いと思われる。

次に、各国語の特徴をまとめると次のようになる。

- (1) 韓国語の依頼発話は、中国人に高く評価される一方で、日本人には「丁寧」と「対人配慮的」項目が低く評価されている。韓国語の言語行動は、中国人とのコミュニケーションでは好意に受け止められる可能性があるが、反対に日本人には「丁寧さに欠けたり、相手に対する配慮が不足する」と受け止められる可能性がある。
- (2) 中国語の依頼発話は、韓国人や日本人に「目的指向的」項目を高く評価される一方で、「丁寧」と「対人配慮的」項目が低く評価されている。中国語の言語行動は、韓国人と日本人とのコミュニケーションにおいて「丁寧さに欠けたり、相手に対する配慮が不足する」と受け止められる可能性がある。
- (3) 日本語の依頼発話は、韓国人や中国人に「対人配慮的」だと評価されている。また中国人に若干低くなっているが、「丁寧」項目も高く評価されている。一方で日本人が思っているほど韓国人や中国人は「目的指向的」だと評価をしていない。この点、情報の伝達に支障を来す恐れがある。

3.4 評価項目の意味するもの

これまで韓・中・日の3ヶ国人の依頼発話のステレオタイプに対して「丁寧」「具体的」「論理的」「対人配慮的」「目的指向的」の5つの評価項目に分けて相互評価をしてもらったが、5つの評価項目の意味について検討することなく無造作に使ってきた。ここで本研究において議論の中心となった「丁寧」、「対人配慮的」、「目的指向的」という評価項目の示す意味についてまとめると次のようになる。

まず、「丁寧」に関しては、次のように語形式から言語表現、さらに表現内容のレベルまで重層的な意味を持っている。

- (1) 語形式の丁寧さ: です・ます体、정중체(존댓말)
- (2) 語彙的な意味の丁寧さ: 菊地(1997)の敬語研究における意味例1)ご丁寧にお贈りいただきまして(「親切だ」の意)

例2)丁寧なことば使い(「品がある」の意)

例3)정중히 모셔라!(「紳士的だ」の意)

例4)정중하게 부탁을 드립니다.(「礼儀正しい」の意)

例5)话说得很郑重(「丁重だ」の意)

- (3) 文法的な意味の丁寧さ: 「ので/から」の意味と使い分け(李吉鎔2008)、「서/니까」の意味(홍종화1996)など
- (4) 言語表現の丁寧さ: 李吉鎔(2003、2009)の行為指示表現における疑問形の使用、授受表現の使用、依頼表現の使用(秋山1984も参照)など
- (5) 表現内容の丁寧さ: 鈴木(1989)の私的領域と丁寧表現、Brown and Levinson(1987)のPoliteness Strategy、井出祥子他(1986)のわかまえ方式の敬語行動、メタ言語行動表現(杉戸1983)など

一般に「丁寧」というと、上のすべてが関与すると思うが、本研究では、一貫して「です・ます体」を用いること、「お願いに参る、書いてくださる、お願いできる」など待遇の意味の高い表現を用いている。これらのことから、日本語の依頼発話に疑問形が使用されるなど一部に「言語表現の丁寧さ」も関わるが、「目的指向的」項目の評価からも推察されるように、「表現内容の丁寧さ」が主に関わるものと見てよいと思われる。すなわち、語形式や言語表現の一つ一つに影響を受けるというよりも、作業仮説の通り、表現内容の丁寧さに対する評価であると判断されるのである。

次に、「対人配慮的」とは、相手に対する言語的(語形式、言語表現)、表現内容的配慮のことである。言語的配慮については一貫して「です・ます体」を使用しているので、表現内容的配慮に限定されるとみてよい。最後に、「目的指向的」とは、作業仮説として設定された、「同意書を書いてもらうという目的を達成しようという意図があり、この意図が各発話に明瞭に提示されている(いない)」ことを意味する。本稿では作業仮説通りの意味によって評価してもらったと考えられる。

4. まとめ

以上、本研究では、韓・中・日の3ヶ国人の「依頼」という目的指向的な言語行動に注目し、「状況の説明、同意書の必要性、謝罪表現の有無」といった内容面を中心に相互評価を実施した。韓・中・日の3ヶ国人の依頼発話に関するインタビュー調査の結果およびアンケート調査の結果から、3ヶ国人のそれぞれのステレオタイプとなる発話を選定し、その発話に対して「丁寧」「具体的」「論理的」「対人配慮的」「目的指向的」の5つの評価項目に分けて相互評価をしてもらった。

その結果、以下のことが明らかになった。

- (1) 自国人の評価の結果と、相手国の人々の評価の結果とを比較すると、程度の差はあるものの同様の曲線を描いており、近似した評価を行っていることがわかった。(§3.1)
- (2) 韓国語や中国語、また日本語の依頼発話のステレオタイプに対する3ヶ国人の評価をまとめた結果、自国語の「丁寧」と「目的指向的」項目を相対的に高く評価するといった一貫した特徴が観察された。(§3.2)
- (3) 各国語の依頼発話に対する相互評価からは、日本人における自国語の依頼発話に関する評価の高さが注目される。発話の意図を明確に示すということ以上に重視される丁寧さと対人配慮といった日本人の依頼発話の定型的な形態が存在することが浮き彫りになった。(§3.3)
- (4) 「目的指向的」や「丁寧」などという評価項目の示す意味について検討した結果、「丁寧」は、語形式や言語表現の一つ一つに影響を受けるというより、表現内容の丁寧さに対する評価であることが認められた。そして、各国語の依頼発話に対する韓・中・日の3ヶ国人のそれぞれの評価の分析結果からは次のようなことが予想される。(§3.3)
 - (a) 韓国語の依頼発話は、中国人とのコミュニケーションで好意に受け止められる可能性があり、反対に日本人には「丁寧さに欠けたり、相手に対する配慮が不足する」と受け止められる可能性がある。
 - (b) 中国語の依頼発話は、韓国人と日本人とのコミュニケーションにおいて「丁寧さに欠けたり、相手に対する配慮が不足する」と受け止められる可能性がある。
 - (c) 一方で日本人が思っているほど韓国人や中国人は「目的指向的」だと

評価をしていない。この点、情報の伝達に支障を来す恐れがある。

本研究では、従来の言語行動のあり方を緻密に記述する研究、または言語行動のあり方を左右する要因の探求を目的とする研究とは一線を画し、言語行動に対する評価研究の領域を開発してきた。具体的な発話資料を基にしてステレオタイプとなる発話を取り出したこと、韓・中・日の3ヶ国人のそれぞれの依頼発話に対する肯定的な評価と否定的な評価を見出したことは、本研究の創見である。そして、本研究では韓・中・日の3ヶ国人における否定的な評価に注目するのであるが、それは言語行動上の転移があれば(生駒・志村1993)、そこに異文化間コミュニケーションにおける摩擦の引き起こされる可能性があると考えられるためである。

なお、本研究では対処できなかった問題点も多く残されている。まず、インタビュー調査の結果から実際の発話のパーツを組み合わせて作り上げた各国人の言語行動のステレオタイプの抽出の問題は改良の余地がある。言い淀みやフィラーなども重要な役割を果たすことが指摘されているので(田窪・金水1997)、可能な限り生の資料を用いたいものである。次に評価項目の設定の妥当性の問題もある。本研究では先行研究の結果を参照しているが、たとえば「丁寧だ」という評価項目が妥当かどうかに関する議論はまだない。関連するものとして、「語彙的な意味の丁寧さ」に関しては、韓・中・日の3ヶ国語において等価ではないかも知れない。さらに、各国人の言語行動のステレオタイプの翻訳の問題もある。3ヶ国語の間の表現の等価性の確認(尾崎編2008:109)なども必要であろう。

いずれも今後さらに検討を要する課題群である。

<参考文献>

- 김종원(2010) 「한중일 의뢰행동의 발화패턴 분석 -한중일 대학생 설문지조사를 중심으로-」 『일어일문학연구』 제73집 한국일어일문학회 pp.111-139
- 元智恩(2010) 「ポライトネス・ストラテジーに対する日本人、韓国人、韓国人日本語学習者の意識」 『日本研究』 44 韓国外国語大学校日本研究所 pp.269-291
- 李吉鎔(2001) 「日・韓両言語における反対意見表明行動の対照研究-談話構造とスキーマを中心として-」 『阪大日本語研究』 13 大阪大学文学研究科 pp.19-32

- _____ (2003) 「韓・日両言語の反対意見表明行動の対照研究-場の改まり度による表現形式の使い分けを中心に-」 『阪大日本語研究』 第15号 大阪大学文学研究科 pp. 67-88
- _____ (2008) 「韓国入学者の日本語原因・理由表現の切換え能力の習得メカニズム」 『日本研究』 第24輯 中央大学校 日本研究所 pp.55-74
- _____ (2009) 「韓国人と日本人の言語行動を左右する背景要因-心的距離の変化とスタイル切換えの様相-」 『日本研究』 第26輯 中央大学校 日本研究所 2009年2月20日 pp.83-103
- _____ (2011) 「異文化間コミュニケーション研究のデザイン」 『日本研究』 第30輯 中央大学校 日本研究所 pp.27-46
- 임영철·김윤희(2010) 「한일 거절표현의 구조에 대한 사회언어학적 접근」 『일본연구』 제43호 한국외국어대학교 일본연구소 pp.525-540
- 임영철·황혜선(2010) 「한·중·일 3국의 의뢰과정에서의 해명에 대한 대조사회언어학적인 연구」 『일본근대학연구』 제30집(상) 한국근대일본학회 pp.63-81
- 홍종화(1996) 「인과구문의 화용론 '-어서' 와 '-니까'의 다성적 분석」 『언어와 언어학』 제22집 한국외국어대학교 언어연구소 pp.357-397
- 秋山高二(1984) 「The Five Clocksの今日的問題点-談話にみる「心的距離」と時計のひずみ」 『言語社会学シリーズ6 言語のダイナミックス』 文化評論出版社 pp.58-89
- 生駒知子·志村明彦(1993) 「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー-『断り』という発話行為について」 『日本語教育』 79 pp.41-52
- 井出祥子他(1986) 『日本人とアメリカ人の敬語行動-大学生の場合』 南雲堂
- 大塚徹(2004) 「日本人と韓国人の不快感の比較」 『専修国文』 75 専修大学日本語日本文学会 pp.25-37
- 奥山洋子(2011) 「韓国の日本語教育における異文化間コミュニケーション教育の可能性」 韓国日語教育学会 2011年度第20回国際学術発表会・シンポジウム 主題発表論文 pp.5-11
- 尾崎喜光編(2008) 『対人行動の日韓対照研究:言語行動の根底にあるもの』 ひつじ書房
- 菊地康人(1997) 『敬語』 講談社
- 渋谷勝己(1998) 「社会言語学のキーテーマ①」 『月刊言語』 27-1 pp.100-105
- 杉戸清樹(1983) 「待遇表現としての言語行動—「注釈」という視点—」 『日本語学』 2-7 pp.25-42
- 鈴木睦(1989) 「聞き手の私的領域と丁寧表現」 『日本語学』 8-2 pp.58-67
- _____ (1997) 「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」 田窪行則編 『視点と言語行動』 くろしお出版 pp.45-76
- 田窪行則·金水敏(1997) 「応答詞・感動詞の談話的機能」 音声文法研究会編 『文法と音声』 くろしお出版 pp.257-279
- 西原鈴子(1994) 『在日外国人と日本人との言語行動的接触における相互「誤解」の

メカニズム-日本語と英・タイ・朝・仏語の総合的対照研究-』平成5年度
科学研究費補助金研究成果報告集

Brown, P. and Levinson, S.(1987)Politeness: Some universals in language use. Cambridge:
CUP

접 수 일: 12월 31일

심사완료: 1월 26일

게재결정: 1월 28일

<要旨>

韓・中・日の3ヶ国の大学生の言語行動の相互評価に関する一考察

本研究は、ある国の言語行動が他国の人に否定的に評価され、言語行動上の転移があると仮定されれば、そこに異文化間コミュニケーションにおける摩擦の引き起こされる可能性があるという認識のもと、韓・中・日の3ヶ国の大学生の依頼発話に対し、それぞれどのような評価が行われ、それはどのような要因によるものか、という要因究明を試みた。

韓・中・日の3ヶ国人の「依頼」という目的指向的な言語行動に対する評価調査では、2009年-2010年にかけて韓国と中国、日本においてそれぞれ約300人の大学生、計922人にアンケート調査に協力してもらった。3ヶ国人のそれぞれの依頼発話のステレオタイプを選定し、その発話に対して「丁寧」「具体的」「論理的」「対人配慮的」「目的指向的」の5つの評価項目に分けて相互評価をしてもらったものである。

その結果、まず次のようなことが確認された。(1)自国人の評価の結果と、相手国の人々の評価の結果とを比較すると、程度の差はあるものの同様の曲線を描いており、近似した評価を行っている。(2)韓国語や中国語、また日本語の依頼発話のステレオタイプに対する3ヶ国人の評価をまとめると、自国語の「丁寧」と「目的指向的」項目を相対的に高く評価するといった一貫した特徴が認められる。(3)日本人は自国語の依頼発話に対して高い評価をする。発話の意図を明確に示すということ以上に重視される丁寧さと対人配慮といった日本人の依頼発話の定型的な形態が存在することが浮き彫りになった。

次に、各国語の依頼発話に対する韓・中・日の3ヶ国人のそれぞれの評価の分析結果からは次のようなことが伺われた。(a)韓国語の依頼発話は、日本人に「丁寧さに欠けたり、相手に対する配慮が不足する」と受け止められる可能性がある。(b)中国語の依頼発話は、韓国人と日本人に「丁寧さに欠けたり、相手に対する配慮が不足する」と受け止められる可能性がある。(c)日本人の依頼発話は、韓国人や中国人とのコミュニケーションにおいて、情報の伝達に支障を来す恐れがある。

こうした具体的な発話資料を基にしてステレオタイプとなる発話を取り出したこと、韓・中・日の3ヶ国人のそれぞれの依頼発話に対する肯定的な評価と否定的な評価を見出したことなどは、本研究の創見である。